

# コミュニケーション能力を高める体験活動

熊野町立熊野第二小学校 対象学年（5年）

体験活動の種類 社会奉仕 自然 勤労生産

体験活動場所 国立江田島青少年交流の家

## 【学校紹介】

○ 「筆といえば熊野を想い、熊野といえば筆を想う」本校がある熊野町は、「筆の都」と呼ばれ、広島市の東20km 呉の北12km、芸南山嶽の中央に位置する海拔約250メートルの盆地帯である。地形は、東西に長く、約8,400メートル、南北約5,400メートル、呉に流れる二河川、海田に通じる瀬野川、広大川に合流する泉川は、その源を本町に発する。気候は温暖である。昭和50年3月に国の伝統工芸産業に指定された筆づくりは、全国生産の8割を越える毛筆をはじめ、画筆、刷毛及び化粧筆の製造が盛んである。

学区は、熊野町の東端に位置し、広島市と隣接している。都市化の傾向が見られるが教育への関心は強く、保護者、地域ともに学校にたいへん協力的である。

本校では、児童一人一人に「生きる力」をつけるため、コミュニケーション能力を高めることをテーマとし、自分の思いや考えを相手に伝える力や相手の思いや考えを理解する力を高め、学び合い、伝え合うことのできる児童の育成を目指している。

○校長名 岡本 正

○児童数 130名（7学級 特別支援学級を含む）

○所在地 広島県安芸郡熊野町初神1003-1

○URL <http://www15.ocn.ne.jp/~kuma02es/>



地域の方とうんとこしょどっこいしょ

## 【体験活動のねらい】

- 学校・家庭とは違った自然の中での体験を通して、進んで他人とコミュニケーションをとる力を育てる。
- 海岸清掃などの社会奉仕活動を通して、社会の一員としての自覚と責任を持たす。
- カキ養殖などの勤労生産にかかわる体験活動を通して、キャリア形成に必要な意欲と態度を身に付けさせる。

## 【指導計画】

実施時期	活動内容	実施時間数	教育課程上の位置付け	実施場所	指導者
6月	○資料名「ありがとう 上手に」 2-(5)感謝	1	道徳	学校	担任
6月	○学習テーマの設定、活動や体験先についての調べ学習、班別の目標設定	5	総合的な学習の時間	学校 地域	担任
7月	○受入先等への依頼文作成	2	国語	学校	担任
7月	○資料名「残った仕事」 4-(3)役割と責任	1	道徳	学校	担任
7月	○海辺の生き物事前学習	2	総合的な学習の時間	学校	大柿環境館 館長

7月	○宿泊体験学習（3泊4日） ・カッター・水泳 ・登山・野外炊飯・オリエンテーリング ・キャンプファイヤー ・天体観測・クラフト ・地域の人々とのボランティア活動	24	学校行事 総合的な学習の時間 理科	国立江田島 青少年交流 の家	学校職員 大柿環境館 館長 天体観測 専門家
9月	○資料名「イルカの海を守ろう」 3-（2）自然愛護	1	道徳	学校	担任
9月	○活動のまとめ ○成果発表会の計画，資料作成	10	総合的な学習の時間	学校	担任
9月	○礼状作成 ○体験活動の感想文	3	国語	学校	担任
10月	○瀬戸内海の自然についての学習	2	総合的な学習の時間	学校	広島大学 生物生産学部 准教授
11月	○成果発表会（地域公開） ・児童発表：宿泊体験学習について ・江田島で作った作品展示	1	国語	学校	担任

## 【体験活動の概要】

「国立江田島青少年交流の家」を利用し、活動の目的に沿って、次のような体験活動を実施した。

### 1日目 「ザリガニつり」「星空観察」

ザリガニつりは、普段生き物と触れ合う機会が少ない児童にとって、じっくりと生物に触れたり観察したりできる貴重な体験となった。星空観察では、外部講師を招いて、星座についての話を聞いたり、実際に望遠鏡を見て金星や土星を観察したりした。直接、生き物や自然に関わることで、自然の素晴らしさや命の尊さに気づくことができた。



### 2日目 「カッター研修」「カキ養殖体験」

カッター研修では、一つの櫂を二人で操作した。仲間と息を合わせて漕ぐことで、我慢強く挫けずに取り組むことの大切さや協同の喜びを感じることができた。カキ養殖体験では、船に乗り、かごの吊り下げの様子や抑制棚等を見学した。また、カキが出荷されるまでの説明を聞き質問をしたり、カキを洗浄する作業を体験したりすることで、働く方の努力や苦勞を感じ取ることができた。



### 3日目 「自然環境体験学習」「野外炊事」「キャンプファイヤー」

事前に学校に外部講師を招いて海辺の環境や生物の見つけ方、生息する生物等についての説明をしていただいた。そのことで、関心・意欲と目的意識をもって活動に臨むことができた。今まで見たこともない生物とも出会う中で驚きと喜びを感じ、こうした生物の住む自然環境を守ることの大切さについて考えることができた。

野外炊事やキャンプファイヤーでは、班内で仕事を分担し取り組む中で自己有用感を感じるとともに、協力してやりきることで達成感を味わうことができた。



#### 4日目 「水泳」「海岸清掃」

いつもは学校のプールで泳いでいる児童にとって、海での水泳体験は、予想以上に波があることで泳ぎにくいことや距離感が陸上とは違い、つかみにくいことなど新たな発見の連続であった。砂浜の生物を探すなど、前日に体験したことに進んで取り組む児童も見られた。活動の終わりには、海岸清掃を行った。4日間で活動してきた自然について振り返り、海岸に漂着しているゴミを調べ、分別して回収することで、自然を守るためには、自分達一人一人が気をつけなければいけないことに気づくことができた。また、きれいになった浜を見て、働くことの意義と奉仕する喜びを感じる事ができた。



#### 【体験活動の効果を高める事後学習】

- 国語「ニュースを伝え合おう」
  - ・宿泊体験学習で学んだことを聞き手にはっきり伝えるために、話の組み立てを工夫して話す。
- 国語「相手や目的を考えて」
  - ・野外活動で支えてくださった方に対して、適切なことばを使い、必要な事柄を整理して礼状を書く。
- 総合的な学習の時間
  - ・事後学習・・・環境問題から自然の素晴らしさについて考える。
  - ・学習のまとめ・・・発表会の計画、資料作成、発表原稿作成、発表練習



- 成果発表会
  - ・自然の中で体験したことを伝えるを通して、友人との関わりの中で、自分が感じたこと、自分が変わったところを児童、保護者、地域等の人たちに発表する。



成果発表会

#### 【交流先や施設等との連携】

熊野第二小学校  
 ○「山・海・島体験活動推進事業」プロジェクトチーム  
 <構成>  
 ・管理職・5学年担任  
 ・教務主任・研究主任  
 ・保健主事

- 熊野町教育委員会
  - ・講師紹介、派遣 ・予算など全般的な指導助言
- 熊野町道徳教育推進協議会
  - ・道徳の授業に係る指導助言
- 広島大学生物生産学部
  - ・瀬戸内海の自然に係る環境教育の指導
- 大柿自然環境体験学習交流館
  - ・海辺の生き物調べを通じた体験学習の指導
- 江田島市観光課
  - ・自然環境体験に係る施設、講師の斡旋
- 国立江田島青少年交流の家
  - ・体験活動プログラムへの指導助言

## 【評価の工夫】

- 事前及び事後アンケート（自主性・他者との協同・自己有用感）に関わるアンケート調査を実施し、事前と事後を比較し、児童の変容を見る。
- 事前学習時、体験活動中、体験活動後の学習において、児童の発言や行動等を観察し、児童の変容を見る。
- 学習シートや評価カードを活用し、課題について常に意識させるとともに児童の変容を確認する。

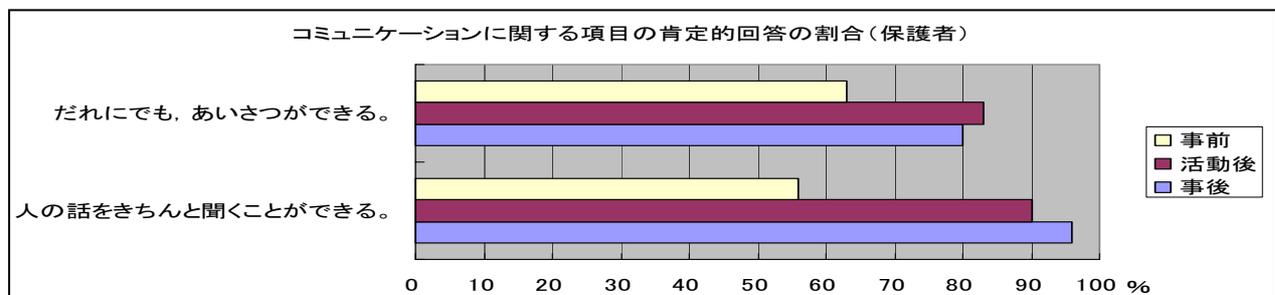
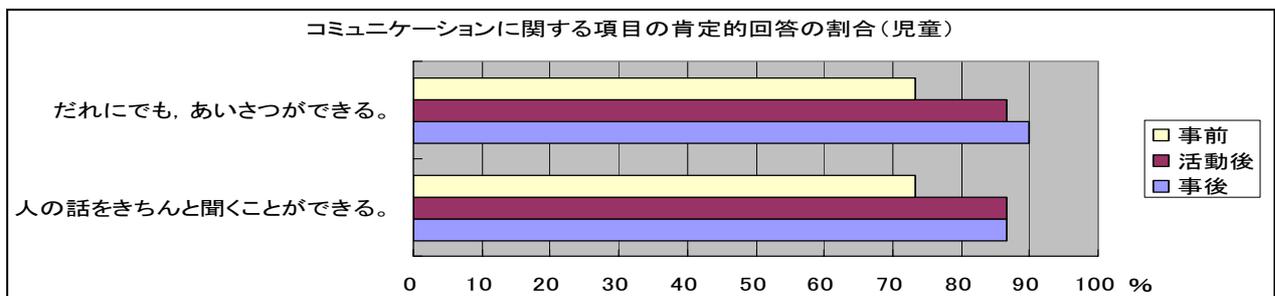
## 【安全面の配慮事項】

- 真夏の体験学習であるため、水分補給、活動の内容・時間については、児童の実態を把握しながら調整した。登山体験を日中の活動として計画していたが、猛暑により児童の健康維持が困難と判断し、他の活動に変更した。
- 食中毒警報の最中であったため、食事の前には必ず手洗いうがいを励行した。
- 食物アレルギーのある児童について、担任、養護教諭（学校）と保護者、宿泊施設（調理担当者）間の連絡を密にした。

## 【体験活動の成果と課題】

- 学校・家庭とは違った自然の中で、3泊4日の体験活動に取り組んだ。自主的にコミュニケーションをとる力を育てることに関しての、事前（6月）・活動後（9月）・事後（11月）のアンケート結果は、次の通りである。

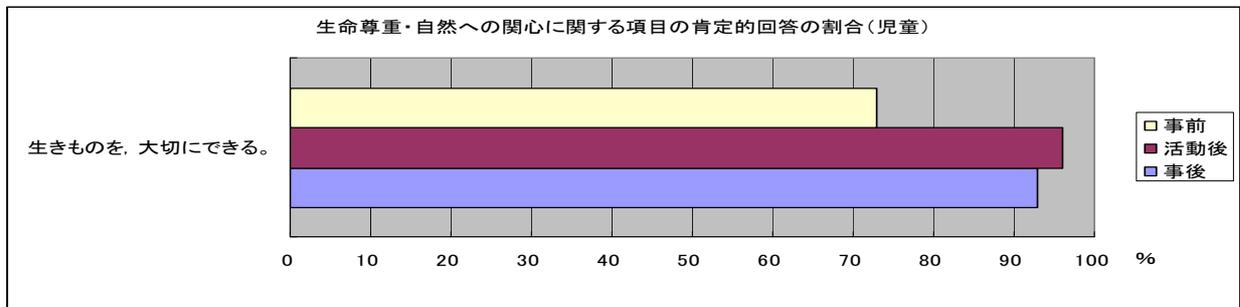
アンケート結果から見て、積極的にコミュニケーションをとろうとする意識が高まってきており、児童自身が自己の成長を感じていることが分かる。保護者からも、「ご近所の知らない人にも自分から挨拶するようになった。」「以前よりありがとうと言えるようになったり、挨拶ができるようになったりしている。」などの声が寄せられており、学校だけでなく家庭でも成果を感じていることが分かる。今後、身に付けた「だれにでも進んで気持ちのよいあいさつや返事をする事」「相手を意識して話を聞くこと」を日常生活の中で、児童が意識して実践できるよう、継続的に指導を行う必要がある。



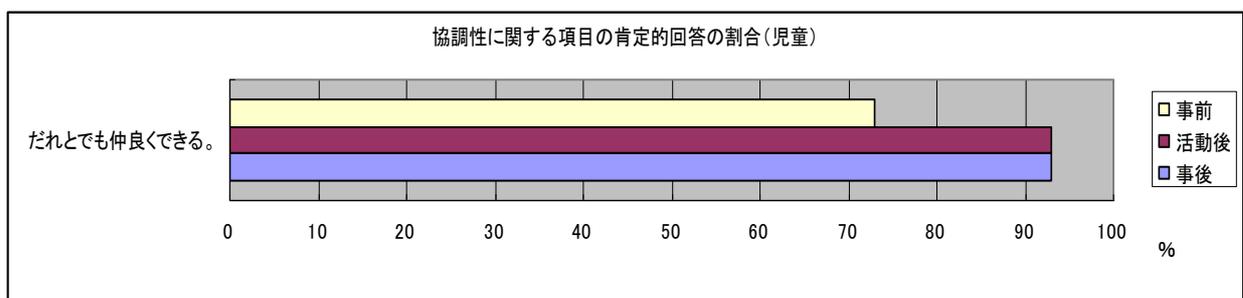
- 活動プログラムの「海の生き物観察」に向け、当日指導していただく講師に事前に来校してもらい、体験地に生息する生き物や様子について話を聞いたり、観察方法を教えてもらったりする事前学習を設

定した。その中で、児童は「やってみたい」という思いをもつことができ、実際の活動では、教えてもらったことを生かして、進んで活動に取り組むことができた。事前の活動をしっかりと行うことで、児童の意欲を喚起することができた。また、安心して充実した体験活動を行うことができ、自然への関心を高めることができた。

- また、自然の中で生き物とふれあう活動を体験した後、学校に戻ってから講師を招いて行った「瀬戸内海の自然についての学習」を通して、自分たちが見つけた生き物を大切にしなければならない。そのためにはその生き物が住んでいる豊かな自然を守らなければならないという思いをもつことができた。

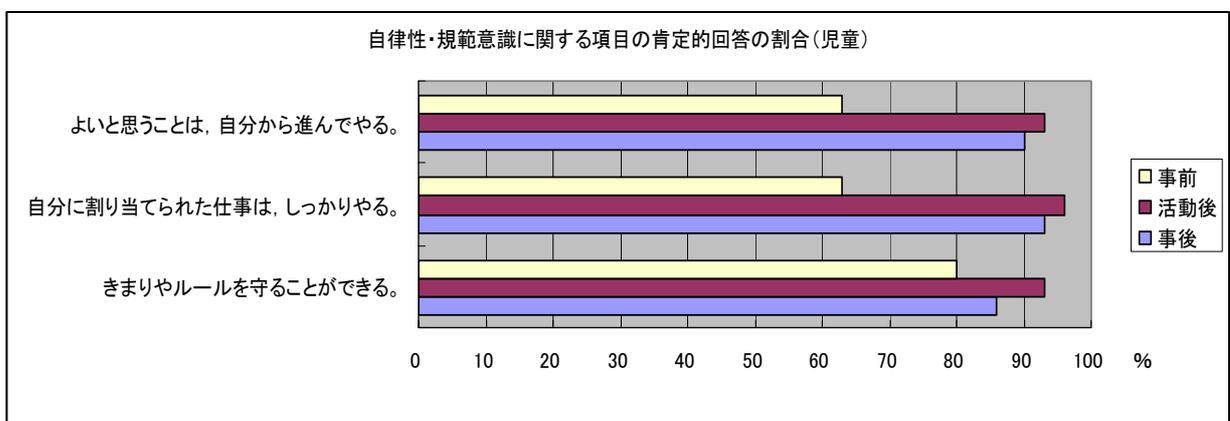


- 長期の集団宿泊活動を通して、友達との距離が近く感じるようになり、活動前に比べて、誰とでも仲良く協力できるようになったと感じる児童が増えた。



- 学校や家庭を離れ仲間と寝泊りする中で、宿舎のルールに従ったり、問題に直面し、仲間と協力して解決したりすることを通して、ルールを守ることや自分の役割を果たすことの大切さがわかり、積極的に物事に取り組むことへの意識が高まった。

しかし、体験で高まった意識も、時間の経過とともに下がってきており、この点については、事後の取組の中で体験活動の成果を生かしてきれてなかったことが考えられ、今後の課題である。身に付けたものが定着するような事後の学習指導の工夫が必要である。



- 長期宿泊ということで多くのねらいや活動を考えると、十分に振り返りを行うことができなくなり、成果も得がたくなる。計画を立てるに当たっては、児童の実態から「つけたい力」を明確にして、具

現化できるように、よりねらいや活動を絞って計画を立てるようしていかなければならない。

- 体験活動から報告会（学習発表会）までの期間が、やや長かったため、児童のモチベーションを維持させる工夫が必要であると感じた。また、今後は、体験活動で身に付けたことを家庭や学校での生活に生かすことができるよう毎日の指導を充実させていきたい。
- 長期の集団宿泊活動は、道徳性の育成において非常に有効であることが分かった。今後継続していく際には、活動のための費用の確保や校内の取組体制の更なる工夫が必要である。